

Magi viderunt stellam

賢者 見 る 星
Magi videntur stellam
話 す ~に 互 い
dixerunt ad invicem
これが 徴 候 偉 大 な 王 生ずる
hoc signum magni regis est
行 く 探 し 求 め る その人
eamus et inquiramus eum
贈 る 彼に 贈 物
et offeramus ei munera
金 乳 香 没 薬
aurum thus et myrrham.

賢者たち(東方の三博士)はその星を見て
互いに話した
これは偉大な王の誕生の知らせだ
行ってその方を探し出し
そして贈り物を差し上げよう
黄金と乳香と没薬(もつやく)を。

『マタイの福音書』(2:1-16)によれば、イエスが生まれた時、東方で知らせとなる星を見たマギ(博士たち)がエルサレムまで赴き、ユダヤ人の王として誕生した方はどこかとヘロデ大王に尋ねる。ヘロデは動揺しながらも側近に尋ね、側近は聖書の記述からそれはベツレヘムであると博士たちに教えた。博士たちはさっそくその場を発つと、星にしたがってイエスのいる場所に行くことができた。幼子の前にたどり着くと、彼らはひれ伏し、黄金(王権の象徴)、乳香(神性の象徴)、没薬(将来の受難である死の象徴)を贈り物として捧げた。ヘロデは新しい王など生まれては困るので、博士たちに場所を教えるよう命じていたが、博士たちは夢のお告げにより、ヘロデを避けて別の道から故郷に戻った。これを知ったヘロデは大いに怒り、ベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を、一人残らず殺させたが(幼児虐殺)、イエスは両親とともにエジプトへ逃れた後だった。

Thus(乳香): カンラン科の乳香樹という木の樹脂が固まったもの。カトリックのミサで香料として焚かれる。原料の樹液が乳白色なので乳香の名が付いているが、ミルクとは全く関係が無い。

myrrham(没薬): カンラン科の低木から得たゴム樹脂。胃腸薬として使われることもあるが、本来、死者の身体に、死体の防腐剤として塗られるものだった。日本語のミイラはポルトガル語の mirra からきているが、その語源は myrrham とされる。



サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂のモザイクに描かれている三人のマギ

Vere languores nostros

真に弱さ我々の彼自身運ぶ
Vere languores nostros ipse tulit,
苦悩を持ち運ぶ
et dolores nostros ipse portavit:
その人の傷癒す
cujus livore sanatisumus.
甘美な木釘
Dulce lignum, dulces clavos,
運ぶ重さ
dulcia ferens pondera,
~のもの 唯一の ~であった ふさわしい
quae sola fuisti digna
支える 王 天 主
sustinere Regem coelorum et Dominum.

まことに我々の弱さをあなたは自ら運び
我々の苦しみを持ち去られ
あなたの傷で我々は癒された
甘き木(十字架)よ、甘き釘よ
甘き重み(キリストの体)を運ぶものよ
汝のみふさわしい
天の王なる主を支えるに

1, 2 行目は紀元前 8 世紀のイザヤ書 53 章 4 節、3 行目は同書 53 章 5 節の中の文章であり、4 行目以下は聖書ではなく、6 世紀のグレゴリア聖歌「十字架賛歌」の中の文章から来ている。3 行目と 4 行目の間には、実に 1300 年の時間差がある。キリスト教の何と雄大なことか。

イザヤ書はキリスト誕生の 800 年前（日本なら縄文時代末期）に書かれた預言の書で、神の裁きと神の救いについて書かれており、特に救世主メシヤによる救いに焦点を合わせている預言書である。53 章にはメシヤの 1 度目の訪れで、メシヤが罪のために苦しむ様が鮮明に描かれている。彼の打ち傷によって癒しが達成され、彼の苦しみによって私達の罪が拭い去られると説いている。二度目にこの世に来られる時、メシヤは勝利者で統治者である王、そして平和の君として来られる（イザヤ 9:6）と書いてある。

前の Magi viderunt stellam の歌で、東方の三博士はこの預言を知っていたから、星のお告げで、いよいよ約束の救世主がイエスとして生まれたと知ったのであり、ヘロデ王も預言を知っていたから、イエスの誕生で自分の地位が危うくなることを知り、子供の虐殺に動いたのである。

「十字架賛歌」は、エデンの園にあってその実を食べることを禁じられていたあの木が、つまり罪の始まりとなったあの木が、聖なる十字架の木となったとする伝承*を歌っている。

その第 8 節：

Crux fidelis,	真実の十字架は、
inter omnes	すべてにおいて
arbor una nobilis;	けだかい木。
nulla talem silva profert,	そのような木はどの森にもない、
flore, fronde, germine.	花、葉、芽においても。
Dulce lignum, dulci clavo,	甘美な木よ、甘美な釘で
dulce pondus sustinens!	かけられた甘美な重さよ。

意外に思うのは、イエスの手足を貫いて、その身体を十字架に打ち付けた釘は、イエスに多大の苦痛を与えた加害者の役割であったろうに、それをも *dulci*(甘美な)と称えていることである。これを考えるに、「十字架賛歌」が、十字架を、私達の罪を一身に担って生贄となったイエスの身体を支え、天の国に送ったことによって、この世によるこびをもたらししたものとして称えるなかで、釘もイエスの身体を支えたものとして、その功績を称えたものと思われる。

*十字架の伝承：

伝承によれば、アダムの死後、その子セトは、楽園の番人をしているケルビム（天使）から、この木の枝を譲り受け、それをゴルゴタの丘に植える。ゴルゴタとは、「されこうべの場所」という意味で、アダムがそこに埋葬されたという言い伝えのある地名である。イエスは、ゴルゴタの丘で十字架にかけられて、亡くなったが、その血は大地にしたたり、浸み込んで、そこに埋葬されているアダムの骨にまで達した。このキリストの血、神の小羊であるキリストの血によって、アダムに始まる原罪が、清くされたのだ、と、その伝承は語っている。

Ave Maria

めでたし
Ave Maria,
恩恵満ちる
gratia plena;
主 あなたと共に
Dominus tecum; (ルカ 1 : 28)
祝福する あなた 女性達
benedicta tu in mulieribus,
et benedictus fructus ventris tui, Jesus.
(ルカ 1 : 42)

聖なる 母 神の
Sancta Maria, Mater Dei,
祈れ ~のために われら 罪人
ora pro nobis peccatibus,
今 時 死 我らの
nunc, et in hora mortis nostrae. Amen.

めでたし、マリア、
恩恵に満ちた方
主はあなたとともにまします
あなたは女の中で祝せられ
また、ご胎内のおん子イエズスも祝せられたもう

聖マリア、神の御母、
罪人なる我らのために祈りたまえ、
今も、また臨終の時も。アーメン。

天使ガブリエルがマリアに受胎告知をするルカによる福音書第一章 28 節「天使の慶祝」と、エリザベトがマリアを祝福したルカによる福音書第一章 42 節「エリザベトの祝辞」が結合されているのがカトリック教会の祈祷文「Ave Maria」の前半。曲の後半には罪深い世で苦しむ人間が、慈悲深い聖母に赦しと救いを願う、深い祈りがこめられる。後半は 15 世紀になって祈祷文の後半に加えられた。マリア信仰を代表する歌である。

〈マリア信仰〉

キリスト教は本来「救世主イエス」の信仰をいう筈なのに、西欧カトリック世界では、イエスよりむしろその母「聖母マリア」に対する強い信仰がある。教会にいても「マリア様の肖像ばかり」で「イエス様」の肖像をさがすのに苦労してしまうほどである。

しかし、『聖書』的には「マリア」は全く「礼拝の対象」となるような存在として描かれてはおらず、むしろ「ただの母親」といった程度の描きしかない。何の「神性」も与えられていない。それなのにどうしてこんな「マリア信仰」が生まれ、しかもそれがキリスト教の主体にまでなってしまったか。

話は 4～5 世紀のキリスト教が広まった当時のローマ帝国にさかのぼる。当時の文化の中心はエジプトのアレクサンドリアで、ユダヤ教も初期のキリスト教もここが神学の一つの中心地となっていた。ところがこの地には伝統的な信仰「イシス信仰」があった。イシスは処女懐胎でホルス（王権のシンボル）を生んだとされて、我が子ホルスを抱いているイシスは母なるもののシンボルであった。ローマ教会は、母であるマリアとイエスの関係をイシスとホルスに結びつけ、イシスの女神神殿をもマリアのキリスト教教会とするなどして、キリスト教の勢力拡大に利用したのである。このローマ教会の目論見はまんまと成功し、今日のマリア崇拝につながっている、と言えるだろう。

ちなみに、聖書を信仰の基盤とするプロテスタントにはマリア信仰は無い。

Senex puerum portabat

老人 子供 持ち運ぶ
Senex puerum portabat
子供 しかし 老人を 支配する
puer autem senem regebat:
処女 生む
quem Virgo peperit,
以後 出産 継続する
et post partum Virgo permansit:
自ら 生む 崇拝する
ipsum quem genuit adoravit.

老人が幼子を抱いていた
だが幼子は老人を統べていた
幼子は処女の生んだものだが
生んでからも処女のままだった
自ら生んだ子を母はあがめた。

みどり児イエスは両親に連れられて、生後 40 日の清めの儀式を受けるためにエルサレムの神殿にあった。ユダヤ人の長男に生まれた男子は生後 40 日目に神殿で清めの儀式を行うという決まりがあったからである。この幼子に注目した 2 人の老人がいた。シメオンとアンナである。

シメオンは、主が遣わすメシア（救世主）に会うまでは決して死なない、とのお告げを精霊から受けており、年老いても死ななかった。そんな彼があるとき霊に導かれてエルサレム神殿に行くと、そこに両親に抱かれた幼いイエスがいた。シメオンはイエスを腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民の誉れです」。さらにシメオンは、「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人に衝撃を与え、あるときは反対を受けると定められています。あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」とイエスの磔刑まで予言したのである。



当時のイスラエルにあっては、“イスラエル ファースト” の墮落したナショナリズムが支配的で、人々がメシアに期待したのは、自分たちだけがローマの支配から解放され、神の栄光が自分たちだけに繁栄をもたらしてくれることであつたので、異邦人までも照らす啓示の光というのは受け入れ難いものであつた。ここに、その後のイエスの受難が預言されたのである。

一方のアンナは、イエスが生まれたころエルサレム神殿に仕えていた女預言者である。84 才という高齢で、若いときに一度結婚したことがあるが、わずか 7 年間暮らただけで夫と死に別れた。それからはやもめ暮らしをし、貧しい中にも夜も昼も神に仕えていた。そんなあるとき、幼いイエスが両親に抱かれてエルサレム神殿にやって来た。シメオンが最初にイエスに近づいて祝福したが、このときアンナもそこにいる幼子がイスラエルの救いとなることを見抜き、すぐに近づいて神を賛美した。女預言者である彼女は、いま目の前にいる幼子イエスこそ旧約聖書の中でいつか到来すると予言されているメシア（救世主）であることを覚つたからである。そして彼女は生きている間にイエスを見たことを感謝し、エルサレムの救いであるメシアの到来を待ち望んでいた人々に幼子イエスのことを語り広めた。

0 quam gloriosum

なんと 栄光 の ~である 王 国
0 quam gloriosum est Regnum
そこ ~と共に キリスト
in quo cum Christo
喜ぶ 全ての人 聖人
gaudent omnes sancti
着ている 祭服 白い
amicti stolis albis
ついてゆく 仔羊 どこへでも 行く
sequuntur agnum quocumque ierit.

おお、その王国はなんと栄光に満ちていることか
そこではキリストと共に
すべての聖人が歓び
白い服をまとい
子羊の行くさきざきについて行く。

テキストは聖書からではなく、諸聖人の祝日※を祝うグレゴリア聖歌から採られている。

※諸聖人の祝日：

11月1日（ハロウィーンの翌日）は伝統的なキリスト教の暦では All Saints' Day、諸聖人の祝日、つまり、すべての聖人たちを記念し祝う日である。

聖人は、本来、聖書に書かれている使徒たちの時代の後、1世紀～4世紀のローマ帝国におけるキリスト教徒のものすごい迫害＝禁止、抑圧、拷問、殺戮のなかで、最後まで神への信仰をあきらめずに亡くなった人＝殉教者たちを記念し、地にいて迫害されている信徒たちの祈りを神により近い天にあって、キリストをとおして神に取り次いでくれる、と信じて崇められたのがはじまり…といわれている。

殉教者のほかには、聖書に書かれている、イエスと同時代を行きた使徒・弟子たち、イエスの母（神の母）マリア、天使たち、預言者たち、旧約の時代に唯一の神への信仰を生きた信仰の父祖たち、また、ローマ帝国でのキリスト教公認以後の時代＝中世を生きて、神への信仰をその生涯の生き様をとおしてあきらかにした人たち…教皇、司教、司祭、助祭、修道士・修道士、一般の信徒である王、君主、騎士、貴族、一般市民、農民、奴隷・・・などなどにいたる、きわめてたくさんの聖人たちがいる。

そのような聖人たちが、天にあって、神とキリストを中心に取り囲み、神を賛美し、キリストの信仰のまじわりをしている。それを記念し、祝い、いまこの世界にあって、現実の人生を生きている私たちの願いを、神の子キリストをとおして神に取り次いでくれることを信じる・・・そんな日が諸聖人の祝日である。

なお、Victoria は、諸聖人の祝日のためであろう、このモテット「0 quam gloriosum」をベースにして、同じタイトルのミサ曲（パロディーミサ）も残している。